

東日本大震災3・11から1年8か月経過して今出来ること

2012.11.11

田口庸蔵

岩手県獣医師会 宮古支会長

早いもので、大震災から2回目の秋が来て、海の物も山の物も普通に取れている実りを見て、私は去年大震災の大被害を受けたことを時々忘れそうになる時がある。1年8か月が経過した今、どうしてだろうと不思議に思う。人間はその時々強い印象に左右されやすく、見慣れた光景に反応しなくなってくるのだろう。増してや、被災地ではない所では少しずつ関心度も薄く、事実テレビでも話題が少なくなった。街が流失し、家々が失われた跡地には雑草が生えコンクリートの基礎さえ隠れて悲しみを誘う光景なのだが、なぜか見慣れて涙が出なくなった。

大震災後、命のある人間の役割を考えて来た。人間は生まれて死ぬまでの間それぞれの立場・任務・使命において生かされているのだが、今まで自分のために生きてきたことの意義について、これから生きていくことの意義について考えるようになった。生きているものは1回の命しかないのだから、その一つの命を大切に有効に献身的に生きることが大事だ。だから自身の意思に反して命を失うことほど残念なことはない。大震災で一瞬にして犠牲になった多くの人々は正に死にきれない思いなのだ。

私は自分のこともやりたいことが沢山あり、大震災の復興にも役に立ちたいと欲張りな考えをしている。しかし、被災した方々は辛い悲しみに耐えながら生きていることを思うとき、自分の命が恵まれていることを有難く感じる。この命もあとどれくらいかは誰にもわからないが、恵まれた分のいくらかを誰かのために使いたいと思う。自分の命は自分の物だけれど、未来に引き継いでいく命を作ることもその命の大きな役目でもある。今の私の命こそ先祖からの贈り物なのだから。

私達一人ひとりの力は小さいけれど、合わせた力は大きく立派に役立つものになる。将来に向かって復興を推進するには、その合わせた力こそ必要である。建物や道路が復旧しても生きている人間がたくさん住んでいなければ街はつくれぬ。街をつくる力はそこに住む一人ひとりの合わせた力なのである。あの辛い悲しみは決して消えるものではないが、明日に向かって強く歩き出そう、再び街をつくろうという勇気を持たなければならない。

私はたくさんの仲間と一緒に復興を支援したい思いで、自分にできる事をやってきた。被災動物の保護活動、病院内一杯の動物である3月は寒くて辛い季節だった、被災動物医療支援、多くの被災犬猫を無料診療、支援物資の提供活動、ガソリンの無いときに配布にたいへんだった、学校衛生支援、先生方の協力で2万7千人分も配布できた、仮設住宅住民3000戸の訪問活動などボランティアを募って、力を合わせて活動してきた。支援に参加した仲間は中学生、高校生、大学生、大人、動物愛護団体、獣医師と幅広い。それに力



を貸してくれた獣医師会、学校関係、ヒルズコルゲート社、多くの支援者の後方支援には本当に感謝しきれないものがある。

今、被災地では市役所、市民、漁業関係、会社関係など連携した復興活動がなされている。しかし地道な復興推進は成果として表にでない。防波堤工事や漁港岸壁工事は数年を要し、市民の生活向上にすぐには反映されず、被災者の新住居も決まらず、店舗経営者も将来不安があり一步前に踏み出せずにいる。他の経済復興と違い、津波被災地の復興には多くの要因を考慮しつつ、基盤整備事業に時間と多額の予算が必要なのだろう。今日の人間は津波被災復興事業を初めて経験するのだから、全てが模索なのだと思う。

でも私達市民は生活復興と経済復興を早く望んでいる。この焦りが人口流出につながっている。個人の生活場所の選択は自由で、誰も強制することはできない。復興と人口減少の相反する問題に正しく答えられる人はいないだろう。不便な生活から早く脱出したいと多くの人が思っていて、「決断」に時間を要しているだけだ。被災者の方々と会話をするとき、その気持ちが伝わってきて返答に苦慮するときがある。

明治時代の記録に、震災は5年で風化し、被災碑を見る人も無くなったと書いてあるのを見た。年代によって人々が変わり、考え方も変わり、経済も街のつくりも変わるものと思うが、私は今までのような街に戻って欲しい。何十年も先まで生きられるものでもないし、見届けることも出来ないの、今は風化しないように、現地から情報を発信したり、主張することに加わったりして、街づくりをしていきたいと思っている。忘れ去られることへの寂しさを感じ、何かしたいと思う。

20011.3.11. 14:46 誰もが忘れない東日本大震災から1年8か月私自身の心の中に具体的な目標が薄くなってきている。日々の動物診療業務についやされて、外に出なくなった。心のなかでは糸車がからんでいるような気分である。

私は今も行方不明の友人のことを思うと涙がでる。思い出すことしかできない自分に歯がゆい思いもする。一家三人犠牲になり、友人夫婦は今も行方不明である。あの日、津波警報が鳴り響く中修理中のお客さんの車を避難させて逃げ遅れたらしい。今私にできる事は何だろう。

私にできる事は与えられた命を友人の分まで大事にして生きること、忘れないこと、友人が好きだった動物たちのために支援活動することだ。被災地を風化させない活動を継続していこう。仲間達といつも手をつないでいよう。復興はこれから本格化するのだ。

皆でメッセージを発しよう。遠くまで。

明日は勇気を出して笑顔で希望に向かおう。